中村俊定文庫
文庫 18
329

( )

非
俳
文
參
考

宮城県図書館蔵書

去来先生確論　附録十餘帖

卯七日先師ハ俳諧の法式を用ひ給いすや　去来曰是を成程用ひてあつき給ハす因て所有時は古式を改り玉ふ事とあり　さゝ水と称に改らるゝは常也　予一先師の俳諧は長頭丸次後の俳諧を以て元来とし給はす　唯代々の俳諧作にしたつき給へり　凡俳諧の付句ハ己に久しといへとも連俳となるハ長頭丸已来にしていまた法式なしよつて連俳の式を仮り用ひらる重て俳諧の法式を改作あらるゝに及はす

宮城県図書館蔵書

10 20 新宿 甲州屋特製

又上より定りたる法式あるもあらず、もし其人あらは是を授益ある共衆なるまし　其時の宗匠達はみな元来連歌師たる故連哥の法式を仮用ひらるゝ也、追ておもみに今の先師し其時に長ずさは連哥によらず俳諧の式は別に立つし　世の人い俳諧をもつて連哥の奴僕のごとく思へり、先師の詞は右別なり、

印七曰　発句に切字を入る事いかに　去来曰、故あり、先師曰切れ字を知るや　去来曰、

10 20 新宿甲州屋特製

いまた傳受なし、唯自分に覚悟し侍る、先師曰、いかに、去来曰　たとへは句ハ一本の木のごとくといへ共根あり付句い枝のごとし　大成といへ共金かなすく根ある句ハ切字の有無によらず本句の体之　先師曰しかり　然れ共それい面影を知たる之　是を傳受すべし、切字の事い連俳共にあり〳〵初す猥に人に語るへからすと　然して先師に承る事多しといへとも俳すべしとありしい是のみたれハ略く述侍る、

許六曰　村雨は雲なし　雲を結ぶに相有、然
時の詠に、　なを〳〵村雨のして花をちらしか
といふい　雲道を知らぬ者の作と之　去来曰
村雨多くは夏の初め秋の半によく降る事人に
問に花に心月に心結ぶ之　君のすゑ友の蛇達
さくらなどに結び付る事にや　いまゝ渥雲ハ
定法せず是て思ふに急雨と書して必竟一陣雨
なれは其風情をよく〳〵つゝ得ぬいつをもかゝる
まし　無雲なるもかゝる故にや

芝師曰　世上俳諧の文章と之に或い漢文を
仮名に和らげ　或い和歌の文章に漢章を入詞
あしく　賤しくいひたなし　或い人情をいふとて
心今日のさかしきくまゝ近探りむめ、西鶴
か流ましく下れる姿あり。我徒の文章は焼に
作意を立て文字ハ雙へ漢章をかるゝ　なたら
かに言つい事ハ部俗のうへに及ふゝゆか
しく言ひとるへしと也。

芝帥曰　俳名ハあなかち熟字によらす　唯と

なへ清く調ひ字形の風流なるを用ゆべし、短冊などに書てなを足る処あり、片名書侍るにこそ〳〵敷字形ハ苦しめるへし　はせ紙ハ仮名にて書ての自慢ことなり、野明か名をはしめ風仮とかけるを歌又の有字ハ名に用ゆへし、とて定帋の印明とは改め給ひける。

古来日　蕉門に千歳不易の句一時流行の句といふあり、是を二ツに引て教給へる其元は一也、不易を知らすれは基たらかたく流行を知

10 20 新宿甲州屋特製

らすれハ風新たならす　不易ハ古によろしく後に叶ふ句なる故千歳不易といふ流行一時の変にして昨日の風今日足しからす今日の風明日に用ひたき故一時流行とはいふ。

魯町曰　俳諧の基とハいかに　古来日　詞にいひ難し、凡吟詠する物品あり　哥ハ基内ふ有俳諧ハ其一也、其ふ〳〵を知らるゝ時ハ俳諧哥ハ如此なる物之と自ら知る〳〵、夫を知らすして宗匠達俳諧をするとて

詩やら哥やら旋頭混本哥やら知らぬ事をいへり。是らは俳諧に遠ひて俳諧連哥といふを忘れたり、俳諧をもつて文を書く俳諧文也、哥を詠はいかい哥こ　身を行ぬ俳諧の人こ唯徒に見を高うし古を破り人に遠ふを牛栖にあた云いひちらしたるいと見苦し　かく斗器量自慢あらは俳諧連哥の名目を仮らず俳諧鉄砲と成り共紀声と成り共家の風を立うるべき事也

当所は　不易流行基一なりといいかに去来は如事弄しかるべし人体に譬ていはむ先ず不易は無為の時流行は坐臥行住居仰伏仰の形同しかるが如し　一時の変風也、其姿は時に替といへ共無為と云事も元い同し人也

去来は　はいかいの修行いおのが数寄たる風の先達の句を一筋に尊み学ひて一句〳〵に不審を起し疑を構へ問らす　もし師のたき句あ〳〵はいかさま〳〵有らんと工夫して為る功

者に尋ぬ一し　我俳諧の上達するにしたがひて人の句と同ゆるゝ己　然り一句くをとめかち成る俳作名ハ吟味の内に日月かさなりて統に巧の成たるを見す

去事ハ、他流と蓮門と各一楽し処に遠ありと見るか、蓮門ハ気情共に其ある所を吟す　他流ハ心中に巧る数と見えたり　譬へハ　御蓮茶よるハうゝ物著せつゝ、元日の空い青きに出れかな　鴨川やニ月めの網に魚一つ、といへ

るかゝし　禁闕に蓮茶あし　二月めに魚一つ取さる事にや　皆是細工せらるゝ己　蓮門の発句ハ一生不通の田夫十歳の小児ハ時に寄ていハ好句なり、都て他門の功者といへる人ハ芝来なし　他流ハその流の功者なりされハ其流の好句ハ成かたしと之へたり。

去事ハ　句業に二品あり、郷句より入と詞道具より入る人ハ郷句多句己　趣句より入る人ハ連吟寄句己　これと

連カ

案方の位を論する時い趣向より入を上品とす

吉東曰　附句はつかされ付句にあらず　付過る病又　今の俳諧附る事を初心の業の様に覚へかつてつめする句多し、聞人と又聞得ず人の言ひ事を恥て附さる句をとめず　都て結なる句を笑ふから多し　我聞けると

八格別又

吉東曰　附物にて附のにつけて附るハ其附なる道

10 20 新宿甲州屋特製

すし知れり　附物をはなれ　情をひかす附んには前句の移り句ひ響きなくしでハ何れの所にてかつめんや　ハ附得へき事也、

吉東曰　蕉門の付句ハ前句の情を引来るを嫌ふ、只前句は是如何成る場いかなる人とその業其位を結見定め前句をつきはあしてつくし

宇庶曰　先師十七の附方路頭に傳受し侍る、

吉東曰　遠境の門人歩に寄て附方を書出し給

ふ　されと後（はせ翁が付方は是に限りたり）と人の迷いならんと是を捨られて　其書出し給ふ分十七條とやらん聞えたり　是を傳受し給ふ事としらず　大津にての事とやらんなれは路通もし其反故を拾ひ取て人に教るにや、許六曰　此事とかがひたるハ千那法師也

去来曰　凡吟ある時ハ風あり風ハ少変す是自然の事之　先師是を能見とりて一風に長くといまるまじき事を定め給へり　俳徴

10 20 新宿甲州屋特製

の風たりとて一風にあらんて変化を知らすハ都て先師の心にたがへり

右十余條は去来実記より抜出して遠人に備ふ　余は津の忘けく紀にいらん雑ま事

去来は略之

空唐丙の　林鐘中旬

教訓の首編

（　　）

干時

寶暦五　乙亥歳

李青

書林

皇都　堺町錦小路上ル所
西村市郎右衛門

東都　本町三丁目
西村源六梓

10
20
新宿甲州屋特製